CISMOR VOICE
April 2018 vol. 26
同志社大学 一神教学際研究センター
CISMOR
Center for Interdisciprinaly Studies of Monotheistic Religions

センター長報告
半年の活動を振り返って

2017年度下半期事業は、①10/27第12回CISMORセミナー“Overcoming the Doctrinal Gap: Parallelism in Contemporary Buddhist-Muslim Perceptions”(「教義の壁を越える:仏教とムスリムの相互理解における『並列主義』」)小布施祈恵子氏(神戸市外国語大学・客員研究員)、②11/1公開講演会 “Who had been Sacrificed? —The Three Monotheistic Religions about Akedah”(「聖なるものへの問いかけ ——神教信仰における献祭—」)蔡式平氏(香港神学院・准教授)、③11/16 第13回CISMORセミナー“Modern Extremist Groups and the Division of the World: A Critique from an Islamic Perspective”(「現代過激派グループと世界分割:イスラームからの視点」)永田正樹氏(法学博士)、④12/2 The 6th International Conference on Values in Religions(第6回宗教的価値国際学術大会)、⑤3/10公開講演会 “The Development of Monolatry Reflected in the Hebrew Bible”「『ヘブライ語聖書』に反映する一神崇拝の展開」長谷川修一氏(立教大学文学部・准教授)でした。

仏教の講演は初めてで、英語で行われました。仏教からイスラームを見る立場で、インドにはヒンズー、仏教、イスラーム、そしてキリスト教の信徒がいますが、そこからの『クルアーン』テキスト検証の一部が紹介されました。CISMOR客員研究員の蔡式平先生の講演もまた英語で行われましたが、中国の聖書研究の一端が紹介され、同じアジアのキリスト教理解、研究の違いが分かるものでした。永田博士のイスラーム過激派の講演では、同氏が学んだ英国の視点が紹介され、人権思想の歴史のある英国のイスラーム過激派の位置づけで、日本や中東イスラーム世界のそれとは異なり興味あるものでした。

CISMORとカイロ大学東洋研究所主催の第6回宗教的価値国際学術大会では、これまでで最高の16名の研究発表がなされました。参加者はエジプト以外では、UAE、レバノン、英国からの参加がありました。

オリエント学会との共催である長谷川先生の講演は、ヘブライ語聖書における神の名称の複数存在をめぐって、それが、聖書テキストが編纂される過程を反映し、やがてひとつの神へと収斂していったことを話されました。

下半期で、大きなものは国際学術大会でしたが、従来になく盛況であったこと、そして同大会の研究発表のフルペーパーを編集して大会記録として初めて出版しました。また、客員研究員として、上述の蔡式平氏(2017.8.21～12.15)の他、アマル・ハサン氏(カイロ大学文学部・講師2017.12.20～2018.3.31)を受け入れました。

その他の活動としては、CISMORが仲介して、サウジアラビア政府招待による現地語学集中研修で17名の学生(同志社からは7名)を派遣し、その不思議な国サウジアラビア語学研修報告会が行われました。前年は英国オックスフォード大学、今年は同志社大学、そして来年はブルネイの大学です。日本人イスラーム教徒の学生たちはメッカ巡礼を果たすことができ、またそうでない学生も至るところで歓迎され貴重な体験をしました。また同志社大学を試験会場としたカイロ大学のアラビア語語学能力検定試験は3年目を迎え、制度的に少しずつ充実していっています。

CISMORは一神教研究、学生の育成を中心に運営されていますが、それを維持しながら、日本の宗教も含めた研究を進めていければと願っております。

(一神教学際研究センター長　四戸潤弥)

国際会議
公開講演会
シンポジウム
研究会
報告

第 12 回 CISMOR セミナー

Overcoming the Doctrinal Gap: Parallelism in Contemporary Buddhist-Muslim Perceptions”

（教義の壁を越える：仏教徒とムスリムの相互理解における「並列主義」）

主催：　同志社大学一神教学際研究センター　(CISMOR)

【講　師】 小布施祈恵子
（神戸市外国語大学客員研究員）
【日　時】 2017 年 10 月 27 日（金）　15:00-16:30
【会　場】 同志社大学今出川キャンパス　至誠館 S34 教室

小布施氏は冒頭で、“Buddhist-Muslim Relations（仏教徒とムスリムの諸関係）”が、南アジア及び東南アジア（ミャンマー、スリランカ、タイなど）における、政治的および社会経済的要因を伴った宗教的衝突の諸事例を踏まえた新たな研究分野であり、仏教徒とムスリムそれぞれの教義的視点に焦点を当て、双方がそれぞれどのように宗教的他者を理解しようとしているかについて検証をする研究であることを説明した。

続いて小布施氏は、現代における仏教徒とムスリムそれぞれの相互認識における主な見解として、仏教は、ムスリムからは「唯一神・創造神概念が欠如している」「偶像崇拝」「多神教」、また、道徳上の教えとして「ブッダは預言者の１人であった？」といった理解がされていること、他方、イスラームは、仏教徒からは「(一神教上の信条に起因して）宗教的に不寛容である」、また「信者間に連帯意識がある」、といった理解がされている点を示した。

このように仏教とイスラームとの間にはしばしば教義的に隔たりがあるものとされていることから仏教徒とムスリムの対話は滞りがちであったが、近年、両教徒の学者の間で、主要な概念や教義の類似性を指摘する新しいアプローチ（“Parallelism（並列主義）”）が、諸宗教の神学における３つのモデル（“Exclusivism（排他主義）”、“Inclusivism（包括主義）”、“Pluralism（多元主義）”）に加わる新しいモデルとして現れたことが小布施氏により紹介された。

それぞれの特徴についての解説は、凡そ次の通りであった。”Exclusivism（排他主義）”は自分自身の伝統のみが救いの道を提供するという立場であり、この見解によれば、他の伝統の信者は、救いについての真実やそれを達成するための手段にアクセス出来ない。“Inclusivism（包括主義）”は救済に関する真理が自分自身の伝統によって最終的に見出されるが、この真理のいくつかの側面は、不完全な形ではあるが、他の伝統にも存在するというアプローチを指す。“Pluralism（多元主義）”は一つの「真理」が世界の人々にさまざまに経験されており、異なる宗教はそれぞれその「真理」を表現したもので、そのすべてが等しく「有効である」という仮説である。

従来は、仏教とイスラームそれぞれの認識に関する分析の際に「諸宗教の神学」を用いることに対し、「『諸宗教の神学』は時代遅れなのでは？」「『仏教の神学』という表現は意味をなさないのでは？」といった批判があり得た。それに対して“Parallelism（並列主義）”は、異なる宗教の教義上の類似点 (parallels) に焦点をあて、2 つ以上の伝統の主な概念と教義との間の類似点を議論することに焦点を合わせる観点を指すものとして定義されるもので、多様な伝統を平等な立場で扱うことを模索するという点では“Pluralism（多元主義）”の一形態と見做されがちだが、各々の宗教が主張する「真理」が究極的に同一のものを指しているか否かについての判断は下されない、と理解する点において“Pluralism（多元主義）”とは別のカテゴリーである、といった説明がなされた。

最後に、小布施氏は、ムスリムの神に対する理解を、インドネシアの仏教徒（大乗仏教徒）により神と同等の存在として示された「アディ・ブッダ（本初仏）」の概念と比較した Alexander Berzin 氏の研究結果を基に、インドネシアでは、唯一の至高神、預言者、聖典を有するならば、多数派であるイスラーム以外の宗教も公認されていること、また、インドネシアの仏教徒は、全てのものの源と考えられている「アディ・ブッダ」を至高神として示していることから、「解釈は異なるものの、仏教において神の概念が受け入れられている」例を紹介した。さらに、イスラームにおいては、アッラーは擬人化されておらず、究極的には人格化されておらず未知である、という理由から、言葉でも概念でも表現できず想像出来ない対象である「アディ・ブッダ」は「概念や言葉を超越、想像を絶するもの」としてムスリムが容易に関連付けることが出来るものである、といった同氏の見解が紹介された。

（CISMOR 特別研究員 阿部泰士）

小布施祈恵子氏

公開講演会

Who had been sacrificed?
— The Three Monotheistic Religions about Akedah —
（聖なるものへの問い掛け — 一神教信仰における献祭 —）

主催：　同志社大学一神教学際研究センター　(CISMOR)
共催：　同志社大学神学部・神学研究科

【講 師】　蔡式平（Sik-ping Choi）
（香港神学院准教授）
【日 時】　2017 年 11 月 1 日（水）　16:50-18:50
【会 場】　同志社大学今出川キャンパス　神学館チャペル

蔡式平氏

蔡氏（通訳：筆者）は冒頭で、ラマダーンが、クルアーンに記されているアブラハムの「息子の献祭」に倣ったものではあるが、3 つの一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラーム）それぞれの聖典（タナハ、旧約聖書、クルアーン）に於ける当該テキスト同士を比較したところ、クルアーンがその献祭によって献げられた息子が誰であるかを示していない一方で、旧約聖書およびタナハはその者がイサクであることを明確に示していること、また、クルアーンではアブラハムの恭順が強調されているが、他方、旧約聖書やタナハでは彼の信仰が強調されている、といった明確な相違点があることを指摘した。

講演では、このストーリーに関し、「アブラハムの地位」「イサクのアイデンティティ」「イシュマエルの後継」「献祭（犠牲）の実践」「神の約束」「3 つの一神教にとっての、祭の記憶とその現代的意義」といった 6 タイトルを掲げ、3 つの一神教の聖典各々の該当テキストとその解釈についての分析が発表された。

先ず、イスラームでは、アブラハムは預言者ムハンマドの祖先であり、彼の行為がアッラーへの恭順の模範的なモデルとして用いられる一方、西暦 50-150 年の間にキリスト教ではアブラハムは最初期のキリスト教徒と見做されるようになり、彼の恭順と信仰の両方が、当該ストーリーの教えに併存する重要な要素であると捉えている点が指摘された。

次に、イサクのアイデンティティについて、ムスリムからは、「預言者（の 1 人）」「義人」等と肯定的に捉えられているが、キリスト教徒からは「イエスの予型」として捉えられており、また、イサクとイエスの類似点について「奇跡的に生まれたこと」「唯一の子供であったこと」「モリヤ山で父によって献げられたこと」「次の（あるいは 3 番目の）日に復活したこと」「迫害される道を喜んで受け入れたこと」「別の生命の為に生命が犠牲にされることがあり得ることを示したこと」が挙げられている点が紹介された。次に、アブラハムが犠牲にするように命じられた「唯一の息子」という言葉の解釈の違いに関して、イスラームではその者が女奴隷ハガルによって生まれた長男イシュマエルであることを指し、一方、キリスト教では自由な身の女サラによって生まれた次男イサクを指している、という相違点が指摘された。

また、献祭（犠牲）については、ムスリム達には、従順でアッラーに近づく喜ばしい行為であると信じられている一方、ユダヤ教徒達には神とイスラエルとの関係を表現する儀礼規範の 1 つであり信仰と義務の表明と見做されていること、そしてキリスト教徒達には、かつてイエスが犠牲として自分自身を献げたことにより、世界の人々がもはや犠牲なしで神と和解することが出来るようになったと信じられていることが説明された。

また、アブラハムに対する神との約束について、ムスリムの主張ではイシュマエルを通すことによるその子孫であるアラブ人達に対するもの、ユダヤ教徒の主張ではイサクを通すことによるその子孫であるイスラエル人達に対するもの、キリスト教徒の主張ではイエス・キリストを通すことによる全人類に対する普遍的且つ霊的なもの、という 3 宗教の相違点が示された。

祭の記憶とその現代的意義について、イスラームでは、アッラーの歓喜を求めようとする人達にとっての 1 つの模範および慣習であり、メッカへの巡礼（ハッジ）がアブラハムの恭順を思い起こす祭典であるとされていること、ユダヤ教では、過越祭の子羊の犠牲と同等の意義があり、ユダヤ教の新年（ローシュ・ハッシャーナー）や大贖罪の日（ヨーム・キップール）に角笛（ショーファル）を吹き、創世記 22 章を読むことで、イサクの献祭を思い起こすこと、そしてキリスト教では、聖餐式、カトリックのミサ、正教会の聖体拝領を通して、イサクの献祭と関連づけて、磔刑に処されたイエス・キリストの偉大な愛と恵を覚えるものとされていること、といった点が挙げられた。

最後に、蔡氏は、3 聖典それぞれのテキストは互いを補完できるものと信じられているが、実際は伝統および内容・形式がそれぞれ異なっていることを指摘し、その上で、3 つの一神教の相違点について、互いの理解・尊重が促進されることを願い、本講演を締め括った。

（CISMOR 特別研究員 阿部泰士）

第 13 回 CISMOR セミナー

Modern Extremist Groups and the Division of the World: A Critique from an Islamic Perspective

（現代の過激派グループと世界分割：イスラームからの視点）

主催：　同志社大学一神教学際研究センター　（CISMOR）

【講　師】　永田正樹
（法学博士）
【日　時】　2017 年 11 月 16 日（木）　15:00-16:30
【会　場】　同志社大学今出川キャンパス　至誠館 S33 教室

永田氏は、イスラーム過激派によって頻繁に行われている、「タクフィール（“異端”の宣言）」、「ヒジュラ（“戦争の家”または“イスラームを拒否する人々の家”から“イスラームの家”への移住）」の呼びかけと、軍事的聖戦の開始について議論した。ポイントはイスラームの宗教的教義の誤解釈であり、そのことが過激派グループの勢力拡大の成功理由の一つになっているという。

過激派の典型的な拡大過程は支配者や政府を批判し、“異端”宣言を行うことに始まる。過激派はしばしば、ムスリムが多数派を占める領域が“イスラームの家”から“戦争の家”または“イスラームを拒否する人々の家”に変化したと主張し始め、その領域のムスリムに“イスラームの家”へのヒジュラを求める。最終的に過激派は、その領域を“イスラームの家”に戻すための、神の名による軍事的聖戦を始める。いわゆる「イスラーム国（Islamic State: IS）」がその典型例である。彼らはヒジュラを“イスラームを拒否する人々の家”に居住しているムスリムに対するテストと捉える。中世のイスラーム法学者の言葉を引用し、“イスラームを拒否する人々の家”に居住する世界中のイスラーム教徒に対して“イスラームの家”へのヒジュラは義務だと強調し、ヒジュラを行うことは、自らの信仰を公式に示す意味があると主張する。

永田氏はヒジュラの概念について、その意味と使用がイスラームの歴史上、変化してきたことを指摘した。本来ヒジュラは宗教的迫害からの単なる逃避であった。預言者ムハンマドは安全保障のためのヒジュラを求めたのであり、IS が主張するような、軍事的聖戦のために戦士を集めるものではなかった。

次のテーマはイスラーム世界における“イスラームの家”と“戦争の家”との分割である。イスラームは伝統的にシャリーアによって支配されていない領域を“戦争の家”とみなすが、この分割自体はシャリーアに基づくものではない。このような分割に法的根拠はなく、中世の学者によって、中世のイスラーム教徒と異教徒との戦争状態の期間に作られた考えである。

永田正樹氏

次に議論されたトピックは、現代の過激派が主張する、神の名による軍事的聖戦（ジハード）を、イスラームが認めてないことについてだった。過激派はある領域を“戦争の家”から“イスラームの家”に戻すための軍事的聖戦を始める。しかしコーランの中でのジハードは軍事的なものではない。コーランとスンナにおけるジハードは、神のために努力することである。特定の学者やグループは軍事的聖戦を呼びかける際の根拠をシャリーアに頼っているが、シャリーアに根拠はなく、軍事的聖戦という考えは人間により作られたものである。

セミナーではタクフィールについても考察された。タクフィールという言葉と概念は、預言者の時代直後の 7 世紀にハワーリジュ派により展開されたものである。ハワーリジュ派は自分達のみが真のムスリムであると主張し、他のすべてのムスリムを不信心者と見なした。現在、IS がハワーリジュ派と同様、自らのみを真のイスラームと見なしている。彼らは宗教上の罪を異端の証拠と見なし、罪人に対して“異端”宣言を行った。ハワーリジュ派は初めてタクフィールを行い、以来、タクフィールは過激派や学者によってイスラームの歴史において繰り返された。タクフィールはシャリーアに法的根拠はなく、実際にはシャリーアでは禁止されている。タクフィールに関する言及はコーランにはないが、コーランの立場は明瞭である。それは、人が人に対して異端宣言を行う権利はなく、神のみが不信心者かどうかの決定権をもっており、その決定は死後にのみ行われるということである。

上記のようにセミナーではイスラームの教義と概念に関する誤解釈について考察された。永田氏はタクフィールを終止することが初めの一歩であると強調し、現代におけるムスリムによる軍事的聖戦を止めさせるために重要であると結論付けた。

（CISMOR 特別研究員 北村徹）

国際会議

第六回　「宗教における価値」

主催：　同志社大学一神教学際研究センター　(CISMOR)
カイロ大学東洋学研究所

【発表者】 Gamal Abd Elsamia Elshazly ほか 15 名（詳細は本文参照）
【日　時】 2017 年 12 月 2 日（土） 9:30-17:10
【会　場】 同志社大学今出川キャンパス　良心館 RY305 教室

四戸潤弥 CISMOR センター長と、
Naglaa Rafat Salem カイロ大学
東洋研究センター・センター長

例年、当センターがカイロ大学東洋学研究　所 (The Center of Oriental Studies, Cairo Univ.) とともに開催している「宗教的価値国際学術大会 (The International Conference on Values in Religions)」が、2017 年 12 月 2 日、同志社大学今出川キャンパスの良心館で開催された。

6 度目となる今大会のテーマは “Holy Times in Religions” で、諸宗教における聖なる時間に注目するものだった。カイロ国立大学文学部教授で、同大学東洋研究センターのセンター長、Naglaa Rafat Salem 氏から、今大会の開催準備を担当した同志社大学および同志社大学一神教学際研究センターへの謝意が述べられた後、研究発表が行われた。

発表を行ったのは 16 名で、これまで開催された中で最大の人数となった。参加した研究者の出身国はエジプト、UAE、レバノン、イギリス、香港、そして日本など、多岐に渡った。

プログラムは大きく 4 つのセッションに分かれ、各々のセッションで 4 名の研究発表が行われた。各セッションのタイトルと司会、研究発表のタイトルおよび発表者は以下の通りである。

Session 1 Title: "Holy Times in Prayer" (Chair: Gamal Abd Elsamia Elshazly (Cairo Univ.))

・"Prayer in Judaism," Gamal Abd Elsamia Elshazly
・"Christ Child as Holy Times in Islam - On the reception of Paidika in the Koran," Hiroshi Tone (Doshihsa Univ.)
・"Holy Time in the Qur’ an," Caren El-Chawa (Independent Researcher)
・"The Holy Time of Boaz - Meeting God in Solitude," Sik-ping Choi (Bible Seminary of Honk Kong)

Session2　Title: "Prayer in the Holy Day" (Chair: Naglaa Rafat Salem (Cairo Univ.))

・"Sabbath in Judaism," Naglaa Rafat Salem
・"Qur’ anic Concept of "Waqt"," Abdulla Galadari (Khalifa Univ./ Al-Maktoum College)
・"Transnational Faith: Early Japanese Free Methodists," Chikako Ikehata (Doshisha Univ.)
・"Using the Pesah rituals in achieving the Palestinian-Israeli rapprochement, a study in "Rachel and Ezekiel" novel by Almog Behar," Mohamed Ahmed Saleh (Cairo Univ.)

Session3　Title: "Holy Times as Festival" (Chair: Mohamed Hawary (Ain Shames Univ.))

・"Yom Kippur - Day of Atonement in Judaism," Mohamed Hawary
・"Beyond the Age of the Torah: Nahmanides (1194-1270) and Two Polemical Contexts," Masahiro Shida (Post-Doctral Fellow, Japan Society for the promotion of Science)
・"Islamic Rituals in Holy Times," Masaki Nagata (Independent Researcher)

左から Gamal Abd Elsamia Elshazly 氏、
Hiroshi Tone 氏、
Caren El-Chawa 氏、
Sik-ping Choi 氏

左から、Naglaa Rafat Salem 氏、
Abdulla Galadari 氏、
Chikako Ikehata 氏、
Mohamed Ahmed Saleh 氏

左から、Mohamed Hawary 氏、
Masahiro Shida 氏、
Masaki Nagata 氏、
S. Jonathon O' Donnell 氏

左から Etsuko Katsumata 氏、
Rehab Abuhajiar 氏、
Norimasa Fujimoto 氏、
Mohamed Fawzy Deif 氏

"Overcoming Jezebel: The 2016 U.S. Election as Sacred Time in American Neo-Charismatic Evangelicalism," S. Jonathon O' Donnell (Aoyama Gakuin University)

Session4 Title: "Holy Times in the Religious Calendar" (Chair: Etsuko Katsumata (Doshisha Univ.))

・"Interactions among Three Monotheistic Religions through Calendars," Etsuko Katsumata
・"Autonomy and Biomedical Ethics in Islamic Medical Practice: Comparative Case Studies of Jordan and Turkey," Rehab Abuhajiar (Dosihsha Univ.)
・"The Problem of the Interreligious Praying in the Grief care," Norimasa Fujimoto (Doshisha Univ.)
・"Fasting time in Judaism and Islam," Mohamed Fawzy Deif (Menoufia Univ.)

上記のタイトルに示されるように、"Holy Times in Religions" という共通テーマに沿いながら、時代的には古代から現代に至るまでの少なくとも 2000 年以上、宗教的にはユダヤ教、キリスト教、イスラームといった諸宗教と、広範に渡るものとなった。

テーマ的にもユダヤ教における安息日(シャバット)や大贖罪日(ヨーム・キップール)、クルアーンにおける聖なる時間についての宗教規定に関する比較的入門的なものから、ヘブライ語聖書の『ルツ記』に記される孤独な状況における神との出会いや、イラク出身のイスラエル人の手による、小説においてパレスチナーイスラエルの和解を達成するため、ユダヤの祭日である過越祭に注目したものなどの文学的なもの、また、暦を通して確認される 3 つの一神教の相互作用や、メシア到来時における時間の聖性について論じた中世のラビの思索を紹介したもの、あるいは、現代イスラーム世界における宗教的特質に則した医学分野でのイスラームの自律性の重要性を指摘したもの、2016 年に行われたアメリカ大統領選におけるキリスト教福音派の動向、グリーフ・ケアにおける異教間の祈りに関する問題などに関する発表がなされた。

上述の様に、これらの発表は時代的、宗教的、テーマ的に、非常に多岐に渡り、また、発表の後には、諸領域の研究者の間で活発な議論が交わされ、まさに「宗教的価値国際学術大会」の名に相応しい、充実したものになった。

翌 3 日には奈良へのエクカーションが実施され、東大寺や春日大社などを巡りながら歓談を行い、日本の伝統的、宗教的な領域への理解を深めつつ、国内外からの参加者達の親睦が深められた。

(CISMOR 特別研究員　北村徹)

公開講演会

『ヘブライ語聖書』に反映する一神崇拝の展開
(The Development of Monolatry Reflected in the Hebrew Bible)

主催：　日本オリエント学会
同志社大学一神教学際研究センター　(CISMOR)

【講　師】　長谷川 修一
（立教大学文学部 准教授）
【日　時】　2018 年 3 月 10 日（土）　13:00-15:00
【会　場】　同志社大学今出川キャンパス　神学館チャペル

長谷川修一氏

長谷川氏は、神の呼び名と神がどのような存在と考えられているかの二点に注目しながら、ヘブライ語聖書（キリスト教における『旧約聖書』）が記述する神について、以下の講演をなされた。

ヘブライ語聖書は様々な資料や伝承を用いつつ、長い年月を経て、複数の編集を受けて成立した。例えば創世記では、神の呼称として、エロヒーム、ヤハウェ、ヤハウェ・エロヒームが用いられているが、19 世紀の研究では、異なる資料が編纂において用いられたと考えた。エロヒーム、ヤハウェ各々の神名が用いられているブロックでは神学的思想の相違が確認されるが、後に各々の神が同一視され、ヤハウェ・エロヒームになったと想定される（文書資料仮説）。

エルは、ヘブライ語が属するセム語一般において神を表す単語であり、その意味は神々の長や父、世界の創造神、議長などである。前二千年紀において、この地域一帯で最高神だったエルの名が神の呼称として一般名詞化したと想定される。ヘブライ語聖書では、固有名であるエルが、エルの称号である単語（シャッダイ・エルヨーンなど）と結び付けられているが、エルとヤハウェが同一視されていく過程で、それらはヤハウェの属性として継承された。

古代西アジアでは神々の名を人名の一部に取り入れる慣習があり、イスラエルでもヤハウェやエルの名を入れた名前が碑文に記され、その出現状況から王国時代、ヤハウェはイスラエルの主神だったと想定される。ヨシュア記 24:14-15 によれば、ヤハウェはカナンの地への定着の際にもたらされた外来の神であり、共通する記述に注目すると、シケムで異国の神々と訣別したとする伝承の存在が想定される。

出エジプト記 3:6 では、アブラハム・イサク・ヤコブというイスラエルの父祖の名前が神と結び付けられて記述され、このことから、異なる地域に伝承されていた 3 部族の神伝承が 1 つに集約されていった過程が想定される。また、申命記 33:2 では、ヤハウェはシナイやセイルなどエルサレム以南の地名と結び付けられ、このことからヤハウェ南方起源説が唱えられている。また、同 6:4 には「ひとつのヤハウェ」という記述があり、このことから複数のヤハウェの神殿が 1 つとされた過程が想定されるが、その歴史的背景として、ヨシヤ王の宗教改革（祭儀集中）、あるいは北イスラエル王国の滅亡後、その住民が南ユダ王国に逃避したことへの融和政策などが考えられる。古代イスラエルの神観は、他の神々を否定する「唯一神教」だったと考えられがちであるが、例えばミカ書 4:5 の記述などからは、王国時代末までは、他の神々の存在を前提としながらも、ヤハウェの優越を主張する「拝一神教」だった実態が想定される。

唯一神教の成立については、バビロニア捕囚がその契機になったと想定される。当時、国家間の戦いは各国が奉じる神々の戦いであり、ユダ王国のバビロニアへの敗北は、バビロニアの神マルドゥクに対するヤハウェの敗北をも意味し得た。それはユダの人々にとってアイデンティティの喪失をもたらし得る事態であり、その危機感がヘブライ語聖書編纂の原動力になったと想定される。具体的に唯一神観が示されるのは、捕囚時代に書かれたとされる第二イザヤにおいてであり（イザヤ書 40-55 章）、そこにはバビロニアの偶像崇拝に対する攻撃が記される。ヘブライ語聖書に記される唯一神観は、アイデンティティ保持のための戦略として生み出された思想であり、捕囚の地で多くの思想や習慣に触れた南ユダ王国の人々が触発され、吸収し、昇華していった過程を反映している。

最後に長谷川氏は、ヘブライ語聖書を重層的なものとして捉えることの重要性を強調された。すなわち、ヘブライ語聖書は、ある時代までは変更不可能な書物ではなく、アップデートが繰り返された書物であり、それは同書がそれほどまでに重視されていたことを示しているということである。

（CISMOR 特別研究員 北村徹）

2017 年度後半
活動報告

主催イベント
【国内開催】

2017 年 10 月 27 日（金）

▼第 12 回 CISMOR セミナー
“Overcoming the Doctrinal Gap: Parallelism in Contemporary Buddhist-Muslim Perceptions”
（教義の壁を越える：仏教徒とムスリムの相互理解における並列主義）
講師：小布施祈恵子（神戸市外国語大学・客員研究員）
会場：同志社大学今出川キャンパス 至誠館 S34 教室

2017 年 11 月 1 日（水）

▼公開講演会
“Who had been Sacrificed?-The Three Monotheistic Religions about Akedah”
(聖なるものへの問い掛け－一神教信仰における献祭)
講師：蔡式平（香港神学院准教授）
会場：同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル
共催：同志社大学神学部・神学研究科

2017 年 11 月 16 日（木）

▼第 13 回 CISMOR セミナー
“Modern Extremist Groups and the Division of the World: A Critique from an Islamic Perspective”
（現代の過激派グループと世界分割：イスラームからの視点）
講師：永田正樹（法学博士）
会場：同志社大学今出川キャンパス 至誠館 S33 教室

2017 年 12 月 2 日（土）

▼国際会議
The 6th International Conference on Values in Religions
（第六回宗教的価値国際学術大会）
“Holy Times in Religions”
発表者：Gamal Abd Elsamia Elshazly ほか 15 名（詳細は本文参照）
会場：同志社大学今出川キャンパス 良心館 RY305 教室
主催：同志社大学一神教学際研究センター／カイロ大学東洋学研究所

2018 年 1 月 31 日（水）

▼報告会
サウジアラビア集中語学研修『異文化体験報告会』
発表者：安仲佳代（同志社大学大学院神学研究科博士後期課程）
杉山裕隆（同志社大学神学部 4 回生）
山口遼（同志社大学神学部 2 回生）
馬場響（同志社大学グローバル地域文化学部 1 回生）
会場：同志社大学今出川キャンパス 神学館 G 1 教室

2018 年 3 月 10 日（土）

▼公開講演会
『ヘブライ語聖書』に反映する一神崇拝の展開
（“The Development of Monolatry Reflected in the Hebrew Bible”）
講師：長谷川修一（立教大学文学部准教授）
会場：同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル
主催：日本オリエント学会／同志社大学一神教学際研究センター
共催：同志社大学神学部・神学研究科

2018 年 3 月 25 日（日）

▼その他活動
第 3 回カイロ大学アラビア語能力試験
会場：同志社大学今出川キャンパス 至誠館 S2 教室

お知らせ
CISMOR の出版物である『一神教学際研究（JISMOR）』と『一神教世界』は、電子版の需要に鑑みて、かねてより機関リポジトリの導入や当研究センターウェブサイトでの PDF ファイル公開などによる電子版への移行を進めてきました。これらの出版物の公開につきましては、電子版のみの発行となります。

CISMOR 最新情報を発信中です

http://www.cismor.jp

CISMOR ウェブサイトより、最新情報を発信しています。出版物をはじめ、過去の講演会の動画、ニュースをご覧いただけます。

発　行　同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）　TEL　075-251-3726　FAX　075-251-3092
〒602-8580　京都市上京区今出川烏丸通東入　E-mail　rc-issin@mail.doshisha.ac.jp
編　集　CISMOR 事務局編集部